

敏腕代議士は甘いのが好き

第一話

「折り詰めの中身は、こちらでよろしいですか？」

和菓子を敷き詰めた折り箱を傾け、店員の三宅千鶴は笑みを浮かべて問いかける。すると、客の女性は箱の中を一通り見回してからうなずき返した。

「はい、これでお願います」

女性は、満足げな表情で答えた。

気に入ってもらえてよかった。菓子の選択と配置を任されていた千鶴は、小さく安堵の息を吐く。そして箱の蓋を閉じ、レジ裏の作業台へと向かった。

箱を薄紅色の平判紙で包み、金色のシールでとめる。次いでリボンに手を伸ばしたところで、不意に子供の声が聞こえてきた。

「ねえ、ママ。いつものお花のおまんじゅうは？」

「今日はもう売り切れちゃったみたいね。また今度、買いに来ましようね」

ちらりと視線を向けると、声の主は先程の女性の娘のようだ。

小学校の低学年くらいだろうか。お気に入りの菓子がなく口を尖らせ、母親のスカートの

柵を左右に揺らしていた。

少女の言うお花のおまんじゅうとは、おそらくいつもショーケースに飾ってある上生菓子のことだろう。

だが、今日はいく売り切れてしまっている。もつとたくさん作っておけばよかったと、千鶴は眉尻を下げる。直後、不意に右手の甲に温もりを感じた。

振り返ると、この和菓子屋の店主夫人、多恵の姿があった。彼女は視線で厨房を指し示し、小声で囁いた。

「千鶴ちゃん、包装の続きは私にまかせて頂戴。さつき、中でお父さんが練り切りを仕込んでいたから、作ってあげたらいいわ」

「いいんですか？」

練り切りがあれば、少女の望む菓子を作ることができる。素直にそう喜ぶたいところだが、時刻はすでに閉店の十五分前。

これから店じまいや明日の仕込みをしなければいけない。そんな忙しい時間帯に、勝手にしてしまつていいのだろうか。不安に思い瞳を揺らすと、多恵はただ笑顔でうなづく。そして千鶴の手からリボンを受け取り、慣れた手つきで包装した箱に巻きつけていった。

「ありがとうございます」

多恵の思いやりに心から感謝すると、千鶴は小走りで厨房へと向かって行った。

それから五分ほどが経過した頃。多恵が包装を終えた菓子折りを客人に手渡し、世間話をしてい

る最中に、千鶴は厨房から戻った。その手には小さなプラスチックケースが一つある。

千鶴は親子のもとに駆け寄り、少女と視線を合わせるようにその場にしゃがみ込んだ。

「さつき言つてたお花のおまんじゅうつて、これでいいのかな？」

問いながら、右手をすつと差し出す。手の平に載っているのは、桜の形をした上生菓子だ。

それを目にした少女は、ばあつと花が開くように笑った。

「可愛いつ！ これ、お姉ちゃんが作ったの？」

「そうだよ。気に入ってくれた？」

「うん」

元気のよい返事に千鶴は満面の笑みを浮かべ、小さな手の平に上生菓子に移す。するとすぐさま、頭上から母親の声が聞こえてきた。

「ご迷惑をおかけして、すみません。ほら、芽衣もちゃんとお礼を言つて」

代金を払おうとしているようで、母親が申し訳なさそうに仕舞つたばかりの財布を手に取る。

自分が勝手にやったことを、気に病む必要はない。そんな意を込めて千鶴は微笑んだ。

「お代なら、この子からいただきますから」

「え？」

意味深に言うなり、千鶴は少女に向き直つた。

「芽衣ちゃん、うちの店のお菓子は好き？」

柔らかい口調で問いかけると、少女はこくこくとうなづく返した。

「うん、大好き」

屈託のない笑顔に、千鶴は少女の頭を優しく撫でる。

千鶴の勤める和菓子屋は洋菓子店が乱立する地域にあり、若い世代は後者を好む傾向にあった。その上、昨今では、コンビニエンスストアやスーパーマーケットでも、洋菓子、和菓子を問わず、手軽に様々な菓子を購入することができてしまう。

だからこそ、少女の言葉は殊更に嬉しいものだった。

「そっか。じゃあ、芽衣ちゃんもともと大きくなっても、ずっとこの店に来てくれるかな？」
「うん。芽衣がおっきくなつて、ママになつてもずっと来るよ」

「ありがとう」

母親が結つたのであるうツインテールを揺らし、少女はすんなりと未来への約束を口にする。千鶴は少女の頭を優しく一撫でしてから身を起こし、母親に向き直つた。

「上生菓子一つで破格の約束を取り付けてしまいました。ぼつたりすぎですかね？」

小首を傾げ、茶目つ気たつぷりに問いかける。千鶴の言葉で、母親はようやく少女から貰うお代がなんであるかを理解しようだ。千鶴に向かって深々と一礼した。

桜の上生菓子を手に、軽やかなステップで去っていく少女と、笑顔でその後ろをついていく母親。二人の姿を見送り終えた後、千鶴はくつと背伸びをした。

時計に目をやれば、閉店時間である午後八時まであと五分。

そろそろ店じまいの準備をしようと思ひ立つたところで、突然背後からばちばちと手を叩く音が

聞こえてきた。

「えっ？」

思わず声を上げて振り返る。すると黒いスーツ姿の男が一人、店の隅に立っていた。

いつの間に入店したのか。まったく気が付かなかつた。千鶴は男を凝視する。

男は黒い短髪に、中肉中背で、ふちなしの眼鏡をかけている。靴や靴などもダークカラーでまとめられており、一般のサラリーマンというよりも、ドラマで目にするSPや私服警官のように見えた。

警戒心剥き出しで向けた千鶴の視線を物ともせず、男は一步を踏み出す。そして胸元のポケットに手を差し入れながら、千鶴の目の前まで歩み寄つた。

「驚かせてしまったようで、申し訳ありません。私は仙堂と申します」

名乗りつつ、名刺を差し出す。千鶴は慌ててそれを受け取って見る。そしてそこに書かれた見ないない肩書きに数回瞬きをした。

「衆議院議員赤坂正也、秘書？」

不思議に思い声に出して読む千鶴の目の前で、仙堂は靴からA4のコピー用紙を取り出して見せた。

「実はこのお菓子を探してきたのですが、どちらにありますか？」

「あつ、はい」

身分をきちんと明かしてくれたのだから、怪しい人ではなさそうだ。不躰な視線を送ってしまつ

たことを反省し、慌てて差し出された数枚の紙に目を通す。それは、この店のホームページを印刷したものだ。

商品リストの中の数点に赤丸が付けられている。千鶴は該当する商品を次々に手籠に入れていくも、二枚目を捲った途端、ぴたりと手を止めた。

特に目立つよう二重丸で囲われている商品は、この店の名物であるどら焼きだ。名物故に、今日は完売してしまった代物だった。

「すみません。こちらの商品ですが、すでに売り切れてしまっています」

恐縮しながら切り出すと、仙堂は小さな溜息を吐いた。

「それは困りましたね」

顎に手を当てて、なにかを考え込むような姿勢を取る。表情には表れていないが、彼から醸し出される雰囲気は困惑を物語っていた。

そんな仙堂の前に、千鶴は窺うように問いかけた。

「あの、もしよろしければ、明日お取り置きしておきますが……」

遠慮がちな提案に対し、仙堂は重い口を開いた。

「実は私の上司である赤坂は甘い物がそれほど得意ではないのに、なぜかどら焼きにだけは目がなくて」

どうやら彼の上司は特別な嗜好をしているらしい。仙堂の説明を聞き、千鶴は目を丸くした。

疲れた時には必ずどら焼きを食す。そう決めているという彼の上司は、仙堂に度々どら焼きを

買ってくるよう命じるらしい。しかし、それでいて仙堂がこれまでに購入してきた数々のどら焼きのどれにも、満足していないのだという。さらにたちが悪いことに、自分好みのどら焼きがどこの店のものかは一切教えてくれないそうだ。そのため、何年もの間、様々な店のどら焼きを買い歩いているのだと続けた。この店のことも、インターネットの口コミサイトで知ったようだ。

長期にわたり、上司の舌に合うどら焼きを探し続けるというのはとても根気のいることだろう。

仙堂の辛抱強さに、千鶴は感心していた。

人にはそれぞれ味覚の違いがあるため、うちのどら焼きなら絶対に気に入って貰えるとは言いつれない。それでも、少しでも力になればと考えていた千鶴は、ふとあることを思い出して手を鳴らした。

「すみませんが、少しだけ待っていてもらっても大丈夫ですか？」

突然の申し出に、仙堂は小さく目を見開くも、静かにうなずき返す。それを確認した後、千鶴は急いで厨房へと戻る。

それから数分の後、透明フィルムに包まれたどら焼きを一つ手にして戻ってきた。

「あの、こちらでよろしければお持ちください」

「これは？」

先程、千鶴が売り切れたと言ったどら焼きを差し出され、仙堂は戸惑った様子で聞き返す。対して、千鶴は苦笑しながら返した。

「わけあり品で、申し訳ないんですけど」

この店で一番人気のどら焼きの製造は、千鶴が一手に任されていた。

朝一番にまとめてその日の分の皮を焼くのだが、鉄板の温度を確認するために、最初に数枚の試し焼きをしている。仙堂に渡したどら焼きは、その時に保存しておいた皮に餡を包んで作ったものだった。

「正規品じゃないので簡易包装になってしまっんですけど、味は同じなので……」

同じ包装をすることは躊躇われるため、無地の菓子袋で許してもらいたい。

眉尻を下げて事情を説明すると、仙堂はわずかに目を細めてそれを受け取り、他の菓子が入った籠と一緒にに入れてレジへと向かった。

「お会計は全部で千二百八十円になります」

紙袋に入れた菓子を手渡すと、仙堂は生真面目に返す。

「先程のどら焼きの分が入っていないようですが」

彼は、よほど記憶力がいいのだろう。千鶴は小さな笑みを零し、彼の誠意による申し出を辞退した。

「あれは正規品ではないので、お代はいただけません」

素人目にはわからなくても、焼き色に多少のムラがある。それに試食用として無料で提供することも、店の主人に了承を得ている。

断固としてそう主張する千鶴に、仙堂はしばし沈黙していた。

もしかして呆れているのかもしれない。でも自分以上に気前のいい店主夫婦の背中を見ながら働

いてきた千鶴は、どうしてもお代を受け取る気にはなれなかった。だから、この日二度目となる問いかけを試してみた。

「では、どら焼きのお代の代わりに、またお店に来てくださると約束していただけますか？」

先程の少女とのやり取りに拍手をしてくれた彼なら、納得してくれるだろう。期待を込めて見遣ると、仙堂は小さく「必ず」と返し、おもむろに財布を取り出した。

お代を受け取り、本日最後のお客となる仙堂を笑顔で送り出す。その後、千鶴はようやく店の後片付けに取り掛かった。

* * *

「ずいぶんと手間取っていたようだな。さっさと例の物をよこせ」

大通りに横付けされた黒いセダンの車中。仙堂が運転席のドアを開けたと同時に、後部座席に座っていた赤坂正也は不機嫌さを隠さずに言い放った。

数多くのメディアがこぞ取り上げる話題の衆議院議員、そして仙堂の雇い主でもある。

モデルのように、すらりとした長い足。役者のごとく整った顔立ち。また家柄も申し分なく、三十五歳という若さで代議士という名声までも手にしている人物、と周囲から評されている。しかし今の正也の姿を見たら、マスコミ連中は仰天するだろう。

切れ長の吊り目を細め、組んだ足の上をトントンと人差し指で叩く。また、反対の手で前髪を掻

き上げ、ネクタイを乱暴に緩めた。

苛立ちを体現するような正也の行動に対し、仙堂は小さな溜息を吐いた。

「遅くなって申し訳ありません。どうぞ」

弁解しても無駄だと悟っているかのような表情で、仙堂は多くを語らず、購入してきた菓子が入った紙袋を差し出す。

正也はそれを奪い取り、がさがさと中身を確認する。直後、お目当てのどら焼きを探し当てて目の前に掲げた途端、眉をびくりと動かして静止した。

「これは……」

エンジンをかけ、車を発進させようとしていた仙堂がその声に振り返った。

「インターネットで評判のどら焼きだそうですよ。既に売り切れていたみたいなんですけど、お店のお嬢さんのご厚意で分けていただきました」

言いながら、四つ折りにしてポケットに入れてあったネット記事を差し出してくる。正也はそれを受け取ると、薄暗い車内でじっと目を凝らした。

表面に鶴の焼き印が押されているこのどら焼きは、『鶴の恩返し』という商品名で売られ、千羽鶴にちなんで一日千個限定で売られているらしい。口コミ欄には、百件を超える書き込みがあった。「味の評価はまだしも、縁起物の噂については半信半疑でしたが、とても人のよいお嬢さんご夫婦がいらっしゃるのを見ると、あながち嘘ではないなと思いました」

口コミにさっと目を通したところ、このどら焼きを手土産にした際に商談が上手くいったとか、

取引先へのお詫びの際に持参して事なきを得たという仕事関係の話が目に残る。また、恋人の両親との顔合わせに持参して喜ばれたなど、私的な吉報も見られた。ゲンを担ぐために購入するという者も少なくないようだ。

それらをただの偶然だと言い切ってしまうのは容易い。しかし、あれだけ人のいい者たちが揃った店ならば、彼らの売る商品に幸福の種が含まれていたとしても不思議はない。仙堂が、店内での出来事を交えてそう告げてくる。

彼の話聞く傍らで、正也はどら焼きのフィルムを剥がし、大口を開けて齧り付いた。

皮のもちつとした弾力を感じた後、餡の蕩けるような食感が口内に広がっていく。甘さも喉にまとわりつくことのないほどよいもので、思いがけずふつと表情が和らいだ。

だがそれも一瞬で、正也はすぐさま手を伸ばし、ギアに手をかけていた仙堂の肩を背後からぐつと掴んだ。

「おい、これを買ったのはどんな女だった？」

「どのような言われましたも……。おそらく二十代の小柄な方だったと思います」
困惑した様子で答える仙堂に、正也は小さく舌打ちをした。

ただの1店員を注意深く観察していたはずもなく、明確な特徴を述べるできないのだろう。そうはわかっていても、正也は苛立ちを隠しきれず、なおも質問を続けた。

「名前は？」

「確か、千鶴さんとおっしゃっていたかと」

仙堂が自信なさそうに答えると、正也は思案顔で再びどら焼きに視線を戻した。

「千鶴……」

ただ聞いた名を反芻する。その間、仙堂が車を発進させていいものか迷っているような視線を投げかけてくる。それに気付いた正也はふと顔を上げ、ミラー越しに仙堂と視線を合わせた。

「悪いが用事を思い出した。少しの間、ここで待っていてくれ」

告げるや否や、返事を聞かずに車を降りる。一瞬、サイドミラー越しに困惑顔の仙堂を視界の端に捉えたが、見て見ぬふりをした。向かう先は、先程仙堂が菓子を買ってきた和菓子屋だった。

第二話

もつと警戒をしておくべきだった。強い後悔を滲ませながら、千鶴は目の前の男を睨みつけた。

勤務先である和菓子屋から自宅アパートまで帰ろうと、店を出たのはほんの五分前。それから距離にして数百メートルしか進んでいない所で、酔っ払いと思しき男に捕まってしまったのだ。

「ねえ、君、あの和菓子屋で働いている娘だよな？」

酒気で頬を染めた男の顔には見覚えがあった。店に客として何度か訪れてきたことのある人物だ。しかも、訪問先への差し入れだという菓子を選定している最中、しつこく連絡先を聞かれた記憶も残っていた。

その際には、店主と多恵が間に入ってくれて、上手く逃れることができたのだが――

面倒な客だとは思ったが、その場限りのことだと危機感を持っていなかったのが災いした。

「君のこと、前から気になってたんだよ。ちょうどこれから呑み直したいと思ってたところだし、一緒に行こうよ」

男は陽気な声で言い放つと、嫌そうな態度を思い切りとっていた千鶴のことなどお構いなしに手首を掴んで歩き出そうとする。千鶴はその力に反発するように腕を引き、なんとかその場に留まろうと足にぐっと力を入れた。

よりによってなぜ今日、厄介な相手に出くわすのかと、心の中で愚痴を吐く。いつもは自転車で通勤しているのだが、今朝方前輪がパンクしていることが発覚し、徒歩での帰宅を余儀なくされたのだ。

店主が夜道は危険だと送迎を申し出てくれたのを遠慮してしまったのは、間違いだっただのかもしれない。

そんなことを頭の片隅で考えつつも、今はこの事態を打開することが先決だと思考を改める。そして猫目を一杯に吊り上げて、目の前の男を睨み上げた。

「私はこれから予定があるので、他を当たってください」

解放されることを願い、きっぱりと断る。だが、男は引き下がる気はさらさらないといった様子で返した。

「あれ、もしかして警戒してるのかな？ 大丈夫だよ。店はこの近くだし、帰りもちゃんと送って

いくからさ」

「だからお断り……っっ」

酔いのせいかな、それともわざとなのか。男は勝手な提案を続けて、さらに強く千鶴の左手首を握りしめる。爪が柔肌やわはだに食い込まんばかりの力だ。

全力で腕を引き抜こうとしても、身を振もつても、拘束こうそうする男の力は増すばかり。継続する痛みに、千鶴の表情はだんだんと歪ゆがんでいく。

理性がどれだけ残っているかわからない相手を、強く刺激することは避けたかった。しかし、穏便にやり過ごすことは不可能だと悟さとり、千鶴はどうとう声を荒あらげ、抗議をした。

「離してください！」

渾身こんしんの力で叫ぶも、あろうことか、男はさらに笑みを深めた。

話の通じない様子に今更ながら恐怖心が込み上げてきて、二の腕に鳥肌が立った。

「そんなに嫌がらなくてもいいじゃない。ちょっと付き合ってもらいたいだけだっつて。もちろん、奢おぼるからさ」

「あなたと食事に行く気なんてないっつて、言ってるでしょう」

言動全てでもって拒絶をしているのに、男はまったく退く様子を見せない。それどころか、千鶴の手を自分の方へ引き寄せようと力を込めてくる。

もうこれ以上は我慢できない。千鶴は込み上げてくる嫌悪感に耐え切れず、足を思い切り後方に振り上げた。

「っ、いつてえ」

次の瞬間、男は苦痛の叫びを上げてその場に蹲うずる。その傍かたわらで、千鶴は困惑したまま立ち尽くした。

男を撃退するために脛すねを蹴ろうとはしたが、実際にはまだなにもしていないのだ。

それなのに一体どうしたというのか。疑問に思っていると、不意に自分の右隣から別の男の声が聞こえてきた。

「いつまでぼうつとしているつもりだ？」

その声に、千鶴は弾かれるように振り返る。だが声の主を視界に収める寸前で、大きな影が目の前を過よった。

慌てて視線で追いかけると、長身の男が一人、酔っ払いの胸倉むねぐらを掴つかんで強引に顔を上向かせていた。

「酒の力を借りて女を思い通りにしようとは、恥ずかしい奴だな」

颯爽さつそうと現れた人物の声は、夜風に負けないほど冷たく響く。

自分に向けられたものではないのに、千鶴は思わずふるりと身を震ふるわせた。冷視れいしされている酔っ払いは、間違はなく千鶴以上の恐怖心を抱えていることだろう。

だが酔っ払いは、精一杯の虚勢きょせいを張って見せた。

「なんなんだよ、お前は。離せよっ！」

「軽く掴つかんでいるだけだが？ ずいぶんとひ弱なことだ」

「くそっ」

つい数十秒前まで千鶴にしていたことを、今度は自分がされている——酔っ払いのその様は、失笑に値するものだといえよう。

シャツの首元を捻り上げる男の手を、酔っ払いは必死にもがいて剥がしにかかる。しかし拳を振り上げてみるも、それもいとも簡単に受け止められてしまっていた。

掴まれた拳を、ぎりつと強く握り潰されたのだろう。酔っ払いは「ぐっ」と低く呻き、表情をさらに苦痛に歪ませる。

そうして痛みが限界に達したのか、真っ赤な顔で再び怒鳴り声を上げようとした瞬間、突然その瞳が大きく見開かれた。

「あんたは……」

なにに驚いているのか。わけがわからない千鶴はただ黙って二人の様子を見比べる。

一方で、男は冷笑した。

「貴様のような無礼な輩に、『お前』とか『あんた』と言われる筋合いはないが……。どうやら、俺のことは知っているようだな」

侮蔑するような物言いで返すと、酔っ払いの顔色があからさまに青白くなる。急激に酔いが冷めていく様を見下ろしている男は掴んだシャツをより一層強く捻り上げた。

「なら話が早い。今の職を失いたくなければ、さっさと失せる。それから、わかっているとは思いますが、金輪際彼女の前に現れるなよ」

片眉を吊り上げ、威圧する。それを真つ向から受け止めた酔っ払いは途端に大人しくなり、男が手を離すと同時にその場にへたり込んだ。

「さっさと失せろと言ったはずだが？」

放心状態の酔っ払いに、男はなおも念押しする。その声に弾かれるように顔を上げた酔っ払いは、脱兎の如くその場から逃げ出した。

あまりの急展開に、千鶴は思考がついていかずその場に立ち尽くす。しばしそうしていた後、ようやくお礼を告げようと顔を上げるも、千鶴は再びその場で硬直することとなった。

満ちた月を背負い立つ男の姿が、あまりに幻想的だったからだ。

長身で、思わず息を呑むほどの綺麗な顔立ち。見惚れてしまうような容姿の男性に出会ったのは、初めてだった。

彼の瞳は、睨まれたら恐怖で動けなくなってしまいそうなほどの鋭さがある。その一方で、一度見つめ合ったら視線を逸らすことができなくなりそうな、引力のようなものを感じる。

彼が、悪者をやつつけるヒーローさながらの登場をしたこともあり、千鶴はまるで自分が映画のヒロインになった気がした。

だがそれも、ほんのわずかな時間のこと。男が訝しげに顔を顰めたのを見た瞬間、千鶴の思考は一気に現実に戻された。

「あのっ、助けていた দিয়ে、ありがとうございます」

気が動転していたせいか、感謝の言葉は思いがけず大きな声となってしまう、千鶴は慌てて口を

手で押さえる。

羞恥に頬を染めてうつむいていると、男は淡々と返した。

「大したことじゃない。だが、こんな時間に女の一人歩きはあまり得策とは言えないな。家はここから遠いのか？」

「えっと、歩いて十五分くらいです」

問いかけに、正直に答える。すると、男はあからさまに眉を顰めた。

今しがた、酔っ払いに絡まれた姿を見られたばかりだ。その上で、これからまた夜道を歩くのだと宣言しているのだから、致し方ないことだろう。

申し訳なさと恥ずかしさでいたたまれなくなり、千鶴は思わず言い訳を口にしていった。

「いつもは自転車なので、五分もかからないんです。でも今日はたまたまパンクしてしまっていて……」

タイヤに釘が刺さっていたことに気付かず、朝を迎えてしまった。不注意だったかもしれないが、不可抗力だとも思う。

そんなことを考えながら、どうして自分はこんな風に弁解しているのだろうと、千鶴は自問自答した。

お礼だけ告げて立ち去ればよかったのではないか。でも、危機管理能力のない軽率な女だと思われたくない。どうしてか、そう思ってしまった。

すると男は千鶴の話を聞いた後、深い溜息を吐く。次いで、すぐ近くに停まっている車を指差

した。

「あれに乗れ。家まで送っていく」

「え？ いえ、それは……」

思いもよらない申し出に、千鶴は一瞬目を丸くする。だがすぐに勢いよく顔の前で手を左右に振った。

助けてもらっただけで十分ありがたいのに、これ以上迷惑はかけられない。そんな想いと、この男もまた初対面の相手だという戸惑いが心に渦巻く。

しかし男は千鶴の言葉を聞き入れるつもりはないのだろう。「いくぞ」と低い声で告げるや否や、千鶴の手を取りずんと車に向かって進んで行く。

完全に腰が引けている状態の千鶴は、引きずられるようにして歩み出すのを余儀なくされた。

「ちよっ、待ってください」

名前も知らない相手をどう呼び止めたらいいかわからず、その背に向かって声を上げる。すると男は足を止めた。まさか立ち止まると思わなかった千鶴は、彼の背に思いっきり衝突してしまった。

振り返った男の不機嫌そうな表情に、千鶴は肩を縮こまらせる。恐る恐る様子を窺うと、男は一つ大きく息を吐いた後、名刺を取り出した。

「そういえば、まだ名乗ってなかったな」

警戒される理由に思い至ったのか。ばつが悪そうに差し出されたそれを、千鶴はおずおずと受け取る。赤坂正也——ほんの少し前に目にした名前が記されていることに気付く。

正也の背後にある車の中を確認すると、先程店に来た仙堂の姿が見えた。

——この人がどら焼き好きの政治家さんなんだ。

普段接する機会のない職業のため、千鶴はまじまじと正也を見つめてしまう。一方、そんな視線に慣れているのか、正也は気にする素振りも見せずに口を開いた。

「さっきの男がまた来ないとも限らないからな。その時は、迷わず俺に電話してこい」

言い方はぶっきらぼうだが、言葉には彼の優しさが滲み出ている。

千鶴は正也の申し出に素直に感謝するも、甘えることはできないと、困ったような表情を見せた。それを遠慮と取ったのか。それとも、今後危険が及ぶ可能性を示唆したことに怯えていると思ったのか。正也は後頭部を掻きながら、先程よりも声を和らげて続けた。

「大丈夫だ。まかり間違つて次があつたとしたら、その時こそ二度と目の目を見られないようにしてやるから安心しろ」

「どうして……」

政治家という立場を忘れたように、物騒な物言いをする。きつと安心させようとしてくれているのだろう。それはわかつたが、どうしてそこまで気遣ってくれるのかわからない。

選挙区に住まう一市民だから。そう推察するも、偶然出会った一人一人にそこまで関わっている、その身がいくつあつても足りないだろう。

千鶴は思わず理由を尋ねようとして、途中で口を噤んだ。助けってもらつておいて、理由を問いただすのは罰当たりな気がしたからだ。

だが、千鶴の表情から言わんとすることを察したのか、正也は苦笑いした。

「乗りがかつた船だからな。この後、なにか問題が起きたとしたら後味が悪いし、俺の責任にもなる。それに……そこまでの理由もある」

「え?」

「どら焼き、うまかつた」

白い歯を見せて笑う姿に、千鶴は一瞬なにを言われたのか理解できず、ぽかんと口を開けてしまう。けれどすぐに自分の菓子を褒められたのだとわかり、かあつと顔を赤らめた。

黙ったことで、納得したと思つたのか。正也は再び千鶴の細い手首を掴み、車に向かって歩き出す。

その背後で、千鶴はもはや抵抗することなく、身体に燻る熱が早く引くようにと念じていた。

* * *

「送っていただいて、ありがとうございました」

アパートの駐車場前に車を横付けしてもらい、千鶴は車中で深々と頭を下げる。そしてミラー越しに仙堂が軽く会釈したのを確認してから、後部座席のドアを開いた。

降車した後、正也たちを見送ろうとすくさま身を翻す。それとほぼ同時に、反対側のドアが開かれた。

どうしたというのか。驚いて目を凝らすと、正也が車から降り立ち、千鶴の隣に歩み寄ってきた。「ここに住んでいるのか？」

彼は千鶴ではなく、長年住んでいる彼女のアパートを見上げている。気のせいか、その横顔が厳しいものに見え、千鶴は身構えるように拳を握りしめた。

千鶴が一人暮らしをしているのは、なんの変哲もない木造二階建てのアパートだ。築十五年以上は経過していて、セキュリティといえるような設備は導入されていない。

周囲に街灯は少なく、細い路地の奥という立地。それらと先程の出来事を加味しているのだろう。そう推察しながらも、千鶴はあえて気付かぬふりを決め込んだ。

「このアパートの管理人さんは、私の勤める和菓子屋の女将さんのお姉さんなんです」

二人は千鶴の父方の親類でもある。故に、店主夫婦同様、アパートの管理人の登代子も家族のような存在で、精神的な支えとなってくれている。千鶴は笑顔で説明するも、正也の表情が和らぐことはなかった。

しばしの間、二人の間に沈黙が流れる。できることなら、このまま自分の部屋まで走り去ってしまいたい。そんな衝動に駆られるも、常識という鎖が足を地面に縛りつける。

それでも重い空気に耐え切れず、千鶴が再度別れの挨拶をしようとしたその時、タイミングよくアパートの一室のドアが開かれた。

「ああ、よかった。千鶴ちゃん、お帰りなさい」

名を呼ばれて視線を向けると、登代子が姿を見せた。

いつも帰宅時に出迎えてくれる彼女は、千鶴の姿を見るなり安堵の表情を見せ、サンダル履きに割烹着姿のまま駆け寄ってきた。なんの連絡もなしに、普段よりも帰宅時間が遅くなったため、心配してくれていたのだろう。

「連絡がないから心配してたのよ。あら、千鶴ちゃんのお知り合いの方？」

暗がりの中でも目立つ容姿の正也を見て、登代子は首を捻りながら千鶴に問いかける。

「えっと、この方はですね……」

彼の素性をばらしてもいいのだろうか。千鶴は隣に立つ正也を窺う。

目が合った瞬間、言わんとすることを察してくれたのか。正也は登代子の前に一步踏み出した。

「初めまして、赤坂正也と言います。彼女とは先程出会ったばかりです」

「続けて、夜道で酔っ払いに絡まれていたところを助けたという事実を告げた。」

「赤坂正也ってあの……」

彼の名に聞き覚えがあったのだろう。確かめるような視線を送った矢先、少し遅れて正也の説明が頭に入ってきたらしい登代子は悲鳴に似た声を上げた。

「千鶴ちゃん！ 酔っ払いに絡まれたって大丈夫なの!?」

千鶴の両肩に手を乗せ、無事を確認してくる。

その過保護と言うべき言動に、千鶴は苦笑いを零す。それでも、心配してくれる気持ちはありがたい、安心させるように微笑んだ。

千鶴の表情から大事はなかつたと確認できたのか、登代子は安堵の息を吐くと、正也に向き直って頭を下げた。

「赤坂さん、ありがとうございます。私が迎えに行っていればよかったです……本当に申し訳ありません」

「そんなつ、登代子さんは悪くない」

肩を縮こまらせて登代子が謝罪したので、千鶴は慌てて制した。

自分の不用心が問題を引き寄せてしまったのであつて、登代子の責任なんて微塵もない。必死に宥めようとする千鶴を一瞥し、正也はすつと姿勢を正した。

「いえ、酒の力を借りて無礼なふるまいをした輩が悪いんですから、お気になさらないでください。私はこれで失礼しますが、今後十分に気を付けて、またなにかあれば遠慮なく言ってください」

言い終えると、正也は登代子にも名刺を差し出して一礼する。その真摯な姿勢に、登代子は感心した様子で目を細めた。

「もうお帰りになるんですか？　せめて、なにかお礼をさせてください」

お茶の一杯でもと引き留めようとすると、正也は軽く片手を上げて固辞した。

「いえ、残務があるので失礼させていただきます」

「そうですか……」

仕事だと言われれば、無理を言うわけにはいかない。登代子が残念そうに肩を落としたのを見て、正也は小さく頭を下げ、千鶴に向き直った。

「で、自転車はいつ直るんだ？」

「え？　ああ、えつと……」

唐突に問いかけられ、千鶴は慌てて指折り数えた。

「修理じゃなくて、新しい自転車を購入することにしたんです。頼んだ商品が入荷されるのは一週間後だと聞いています」

パンクした自転車は、もう十年以上使っていた古い物だ。チェーンの錆びつきも気になっていたため、これを機に買い替えることにした。そこでせっかくなら好みの色の物かと思ひ、今朝取り寄せで注文したばかりだった。

こんなことになるのなら、在庫品で間に合わせておけばよかった。千鶴が後悔する目の前で、正也は顔を顰める。険を帯びた様子を肌で感じ、千鶴は彼を直視できずにうつむいてしまった。

今更注文を取り消して、自転車屋に迷惑をかけるわけにはいかない。もちろん、和菓子屋の店主夫婦や登代子に頼ることもしかりだ。

やはり帰りだけでもタクシーを使うのが得策だろう。そんな決心を声に出そうとした矢先、正也がおもむろに一つの提案をした。

「新しい自転車が届くまで、うちの者に送らせる」

「いえ、さすがにそんなことまでしていただくわけにはつ」

予想だにしかつた提案に、千鶴は目を剥いて驚愕を露わにする。そしてすぐさま否定の言葉を紡ごうとしたのだが――

突然隣からばんつという大きな音が聞こえてきて、千鶴は大きく肩を震わせてそちらに向き直る。すると嬉々とした様子で、登代子が手を合わせていた。

「まあ、よろしいんですか？ それなら安心だわ」

正也の申し出を、素直に厚意として受け取ったのだろう。登代子の歓迎の言葉を耳にして、千鶴はそれ以上なにも言えなくなってしまうた。

登代子は本当の親のような存在で、いかなる時も彼女にはかなわないのだ。

とはいえ、正也は数時間前まではお互いの存在も知りえなかった赤の他人。しかも、通りがかりに助けてもらったという借りがあるのに、その上毎日迎えてきてもらうわけにはいかない。

どう言つて断るべきか。頭の中で忙しく考え込んでいる最中、登代子が千鶴の肩に手を置いて、屈託のない笑みを向けてきた。

「よかったわね、千鶴ちゃん」

「……………はい」

こんな親切な人がいるなんて、この世の中も捨てたものではない。そう言つて幸運だと喜ぶ登代子に、千鶴は曖昧な笑みを返した。

もはや、選ぶべき選択肢は一つしかない。腕組みをしたまま返答を待つ正也に向き直ると、千鶴は膝上に手を当てる深く腰を折つた。

「ご迷惑をおかけしますが、どうぞよろしくお願いします」

丁寧に願い出る千鶴の隣で、登代子はうんうんと相槌を打つ。答えを聞いた正也は、ようやく口

元を緩めた。

「こちらが言い出したことだ。迷惑だなんて考えなくていい。それに、大人に甘えられるのは子供の特権だからな」

「っ、私はもう二十七です！」

それまでの感謝も一気に吹き飛ぶような物言いに、千鶴は思わず怒鳴り声を上げた。手元に塩があつたなら、閑取よりも豪快に投げつけてやったことだろう。

千鶴の怒りの理由、それは正也が千鶴のコンプレックスに触れたからに他ならない。

百五十五センチと小柄な体型で、大きく真ん丸の目に少し低い鼻。その上、身体の凹凸も少ないやせ形。ポブカットでなんとか隠している丸顔も、実年齢よりもかなり幼く見られる一因だった。

一年前に一人で映画館に行った際にも学生料金を提示されたが、まったく嬉しいとは思わなかった。今まで味わった屈辱ともいえる数々の記憶が呼び起こされ、千鶴は恩を忘れて正也を睨みつけた。一方、正也は対照的に笑みを深めた。

「そのくらい、威勢よくしている」

「え？」

唐突に投げかけられた言葉に、千鶴は虚を衝かれた。

無礼な物言いは、遠慮させないための演技だったのだろうか。疑問に思っていると、正也は少し乱暴に千鶴の髪をかき混ぜた。

「ちよっ、なにを……………」

「で、迎えの時間は今日と同じでいいのか？」

「あつ、はい。大丈夫です」

咄嗟に返事をする、正也はこの日一番の優しげな笑みを見せる。そして登代子に軽く一礼した後、無言のまま仙堂の待つ車に向かって歩き出した。

あつけない去り際に、困惑顔で立ち尽くす。そんな千鶴に、登代子は意味深な笑みを零すと、夕飯を自分の部屋に食べに来るように言い残して先に帰ってしまった。

千鶴がようやく我に返ったのは、それから数分後。夜風にぶると身を震わせた時だった。

思考が正常に戻った途端、脳裏に一つの懸念事項が浮かんで来た。

「お礼、どうしよう」

もはや、一週間のお迎えという厚意を受け入れざるを得ない状況だ。

遠慮は無用と言われても、なにもしないわけにはいかない。

タクシーの代わりだと現金を渡すわけにはいかないし、どの程度の値段の品が妥当なのかも想像できない。あれやこれやと頭を悩ませていると、不意に仙堂と正也の言葉が脳裏を過った。

確か、仙堂は正也の好物はどら焼きだと言っていたはずだ。現に、正也本人からもうまかったと言って貰えた。それなら、自分の作ったどら焼きや和菓子を渡すことがお礼になるかもしれない。

安上がりになってしまふところは気が引ける。けれども今は他に良案が浮かばず、一旦自分で自分を納得させることにした。

ようやく強張っていた肩の力を抜くことができ、気を取り直すために大きく深呼吸する。次いで

荷物を置きに、自室に向かって階段を駆け上がった。

第三話

「じゃあ、お先に失礼します」

「お疲れ様、気を付けてね」

「はい」

多恵と店主に別れの挨拶を済ませて戸を閉めると、千鶴は店の少し先に停車しているセダンに視線を向けた。

正也の提案により毎日迎えにきてもらうようになってから、今日で二日目。少しでも仙堂を待たせる時間を短縮しようと車に駆け寄り、後部座席のドアを開く。直後、千鶴はドアを全開にしたまま、その場で固まってしまった。

「なんで……」

思わず口を衝いて出た言葉を隠すように、両手の平で口を覆う。目の前には、モバイルパソコンを膝に載せ、画面をじっと見つめている正也の姿があった。

車に乗っているのは仙堂だけだと思いついていた千鶴は、予想外の光景を前に立ち尽くす。すると、夜風が頬を撫でた瞬間、正也の鋭い瞳が千鶴の姿を捉えた。

「おい、いつまでそこに突っ立っているつもりだ」
「っ、すみません」

仕事の邪魔をしてしまったかと、慌てて謝罪して正也の隣に身を滑り込ませる。その様子をバツクミラーで確認した仙堂は、ドアが閉まるのと同時に車を発進させた。

なにか話しかけた方がいいのだろうか。無言の時間に息苦しさを覚え、千鶴はちらりと横目で正也を確認する。

視線の先で、正也が眉間を揉みほぐしている。よほど疲れているか。そう思った瞬間、千鶴の口から言葉が自然に滑り出た。

「お疲れ様です」

「ああ……」

やはり、その声には隠しきれない疲れが滲んでいる。会話をするのも億劫で、短く返したのだろう。

こういう時はなんと声を掛ければいいのか。それとも、黙っていた方がいいのか。迷った挙句、千鶴は思い出し、鞆に手を差し入れた。

「あのこれ、よかつたら食べてください」

「どら焼きか」

「はい。中はサツマイモ餡です。今日も試作品で申し訳ないですけど、甘い物は疲れによく効きますよ」

ずいっと目の前にどら焼きを差し出すと、心なしか正也の口元が緩んだように見える。表情の變化に千鶴もつられて目を細めると、正也はふと意味深な言葉を呟いた。

「……変わらないな」

「え？ でもそれは……」

渡したのは新作の試作品で店頭には並んでいない。それなのになぜ、変わらないなど言うのか。不思議に思っつて首を傾げるも、正也はただ曖昧に笑って返すのみ。

戸惑う千鶴の前で、正也はおもむろにどら焼きを千切つて口に入れる。それから「うまいな」と一言零し、次の一欠片を千切りながら問いかけてきた。

「お前、この後なにか予定はあるか？」

「いえ、特には」

反射的に顔を向けると、即座に正也の瞳に捉えられてしまう。全身を射抜くような強い視線に、千鶴ははっと息を呑んだ。

「なら、ちよっと付き合え」

言うなり、仙堂に行き先の変更を告げる。そんな正也の横顔を呆然とした様子で見つめ、千鶴は反論の余地を失ってしまった。

連れて来られたのは、店から車で三十分ほどの場所にある公園だ。高台から夜景が一望できるとあって、カップルの姿が多く見受けられた。

だが、千鶴が仙堂の携帯電話を借りて登代子に帰宅の遅れを告げている間に、そのほとんどは帰ってしまったようだ。いつの間にか、あたりには自分たちの姿しか見当たらなくなっていた。

「これでいいか？」

「はい、ありがとうございます」

きよろきよろと周囲を見渡す千鶴に、ベンチに座る正也が差し出したのは近くの自販機で購入したのであろう缶コーヒーだ。お礼を告げてそれを受け取ると、正也の隣に腰を下ろす。そして美しい夜空を見上げた。

思えば、もう何年も仕事のことだけを考えてきた。こうして夜景を見るところか、空を見上げることすらなかった。

千鶴が感慨深く思いながら我が身を振り返っていると、正也がぼつりと呟いた。

「昔、よく弟を連れてここに来た。家には頻繁に他人が入り込んでいたから、遊ぶ場所がなくてな」

正也の声がどこか昔を懐かしんでいるように聞こえて、千鶴はその横顔をじっと見つめる。きちんと聞いているという意思表示に相槌を返した。

「親父は帰って来ない日がほとんどだった癖に、家に帰る時はいつも他人を引き連れてきやがるから迷惑極まりなかったな」

「……………」

正也の言葉に、彼の父親が有名な政治家であったことを思い出す。常に周囲に人がいる様子が容

易に想像できた。日常的に家に他人が入りするのは、子供にとっても大きなストレスだったことだろう。

正也は今、呆れ笑いをしているのに、どうしてか、千鶴には泣いている子供のように見えてしまう。

「運動会や授業参観に来ないのは当たり前で、母親の誕生日や結婚記念日だって家にいた試しがない。その癖によそでは家庭円満をアピールしたがるからたちが悪い」

正也の口から次々と語られる父親との確執。状況は同じではないが身に覚えのある感情を垣間見

て、千鶴はきゅつと唇を噛みしめた。

「家庭を顧みない親父より、よほど俺の方が家族のために尽力してきたつもりだがな。それでも周りはむかつくほどあいつのようになれと言いやがる」

舌打ちまじりに紡がれる言葉に、千鶴は目を瞠った。

父親失格の男のようになれと言われることが、心底我慢ならない気持ちには痛いほどよくわかる。家族に対する複雑な心情を吐露する正也を前に、千鶴の胸の中が否応なしにざわめく。

それは自身もまた、血縁者との間に決して埋めることのできない溝があるからに他ならない。けれど、そんな事情など知る由もない正也は自嘲気味に笑った。

「悪かった。久しぶりにジジイ共とやり合ったせいかな、気が立っててな」

「いえ……………」

どうやら後援会の者たちとの会合で、父親を引き合いに出した叱咤激励を受けたことが、彼の疲

労の主な原因らしい。苛^{いらだ}立^たつていても、終始穏やかに対応しなければならぬ立場だ。悔^{くや}しい想いを何度も呑み込んできたのだろう。

上手い慰^{なぐさ}めの言葉は依然^{いぜん}見^みつからない。それでも、吐き出すことで少しでも彼の心が軽くなればいい。そんな願いを胸に、千鶴は夜風に揺れる髪を耳にかける。

ふと視線を感じて隣に向き直れば、正也がじつとこちらを見つめて問いかけてきた。

「お前は今の店に勤めて、長いのか？」

「そうですね。実家は東北にあつたんですけど、高校進学から登代子さんのところでお世話になっているので、もう十年以上になります」

彼の身の上話を聞いた後だからか、人にはあまり言ったことのない話も、するりと答えられた。

「小さい頃から登代子さんたちには可愛^{あい}がってもらっていて。父が亡くなってから頼^{たの}まればかりなので、早く一人前になって恩返し^{おんがし}がしたいんですけどね」

登代子や多恵は子供がいなくてもあつて、まるで本当の母親のように接してくれた。多恵の夫である和菓子屋の店主は父親のような存在だ。そして、小学生の千鶴にお菓子作りを教えてくれた人でもある。

それはもしかししたら、物静かな彼なりの子供とのコミュニケーションの取り方だったのかもしれない。武骨^{ぶこつ}な指^{さし}から美しい和菓子が作られる様^{さま}は魔法^{まほう}のようで、感動^{かんとく}しきりだったことを今でもよく覚えていてる。

いつかきつと、自分も同じ魔法^{まほう}が使えるようになりたい。幼き日に抱いたそんな想いが、今日^{こんにち}の

千鶴を作っていた。

夜空に浮かぶ星を眺め、穏やかな気持ちで告白する。しかしそれも束の間^{つかの間}のことで、正也の次の言葉で思考は一気に現実^{げんじつ}に引き戻された。

「家族はどうしてる？」

何気^{なにげ}ない質問だが、それは千鶴の身体を強張^{きょうちやう}らせるのに十分^{じふぶん}だった。それでも、千鶴は胸^{むね}に渦巻^{うずま}くどす黒い感情^{かんじ}を悟^{さと}られぬよう、必死^{ひつし}に何気^{なにげ}ない体^{てい}を装^まつて返した。

「祖父は今、東北にある施設^{しせつ}に入所^{にゅうじょ}していて、時々会いに行きます。母親は父が亡くなってすぐに再婚^{さいこん}してしまったので、疎遠^{そえん}にしています」

これ以上は聞かないでほしい。そんな意^いを込めて語尾^{ごび}を弱めたところ、正也は「そうか」と言^いつたきり、それ以上の追及^{しゆいかく}をしてこなかった。

それにほっと胸^{むね}を撫^なで下^{くだ}ろすも、二人の間に流れ出した沈黙^{しんもく}には居心地^{いこち}の悪^{あく}さを感じた。

明日^{あした}に備^{そな}えて、そろそろ帰^{かえ}った方がいいのではないだろうか。そう提案^{ていあん}しかけた時、ベンチの上^{うへ}にあつた千鶴の手の甲^{かた}に、そっと温かな手が重ねられた。

「っ」

「小さい手だな。あの頃の弟の手もこれくらいだったか」

思わず手を引^ひつ込^こめそうになるも、寸前^{すんぜん}で堪^たえる。その理由は、正也の穏やかな笑^えみを直視^{ちくし}してしまったからに他^{ほか}ならない。

彼には弟がいるようだ。おそらくかつての弟の姿^{すがた}を思い起こしているのだろう。仕事で疲れた彼

の中に流れる穏やかな時間を守りたい。そう思い、千鶴はしばらくの間黙って手を繋がれていた。それからどのくらいの時間が流れたのだろうか。無言のまま夜空を見上げていた千鶴は、そっと疑問を投げかけた。

「一つ、聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「どうして、毎日のお迎えを申し出てくれたんですか？」

普段から、困っている人を見れば助けずにはいられないしょうかん性分なのか。それともただの気まぐれか。二日前から抱き続けてきた疑問を投げかける。

対して、正也はゆつくりと口角を吊り上げた。

「一言でいえば、お前のどら焼きが気に入ったからだな」

「本当ですか？」

からかわれているのではないだろうか。半信半疑で確認すると、疑われるのは心外とばかりに返された。

「俺はどら焼きの好みに関しては特別にうるさいんだ。あれを作るやつに危険が及ぶくらいなら、多少の手間は惜しまないさ」

千鶴の作るどら焼きを食べるために、千鶴の安全を守る。嘘のような動機を至極当然のように語る正也に、千鶴は呆気にとられた。

だが、考えようによっては、そこまで自分の作るどら焼きを気に入ってもらえたということは、

和菓子職人冥利みょうりに尽きるのではないだろうか。そう思い至り、自然に笑みが零こぼれた。

「ありがとうございます」

「感謝は、どら焼きで返してくればいい」

照れ隠しのような物言いに、千鶴はくすくすと笑ってうなずき返した。

それからしばらくの後、正也は一度腕時計に視線を向けてから立ち上がる。手を繋がれたままの状態とあって、千鶴もそれに倣ならった。

「帰るか」

「はい」

元気よく返し、促うながされるままに正也の半歩後ろをついていく。するとどうしたことか、十メートルほど進んだところで、正也はぴたりと歩みを止めた。

疑問に思っ首を傾げていると、正也が顔だけで千鶴を振り返る。そして愉快ゆかいそうな笑みを湛たえたまま、口を開いた。

「さっきの、やり直してもいいか？」

「さっきの？」

「ああ、お前を迎えにくる理由を言い直したくてな」

ついさっき、千鶴に手を差し伸べたのはどら焼きのためだと言っていた。それが嘘だったということだろうか。

困惑しながら改めて答えを待つ千鶴に向かい、正也は不敵に笑って見せた。

「女一人守れなくて、国会議員が務まるかってな」

本来、国会議員というのは国民の生活を守る立場にある。ならば、目の前で危険な目にあつた女性に手を差し伸べるのは当然のことだろう。

取つてつけたような理由を言い直す正也に、千鶴はふつと噴き出した。
「かっこいいですね」

千鶴もまた、冗談めかした褒め言葉を返す。最初にそれを聞いていたら、彼に対する印象はだいぶ違っていただろう。さしずめ、「気障な二枚目」といつたところか。

いつまでも笑いによる肩の震えを止められない千鶴に、正也は怒るところか愉快そうに口角を上げた。

「お前、それは今更だろう？」

おどけるような口調に、今度は揃つて声を出して笑い合う。二人は楽しい声を響かせながら、仙堂が待つ駐車場まで緩やかな坂を下つていった。

第四話

「遅くなつてしまつて、すみません」

正也に助けられた日から数えて五日目の夜。最後のお迎えとなるこの日、仙堂の待つ車の後部座

席に乗り込んだ千鶴は、息を切らしながら謝罪した。

閉店間際に来た客が、大量の手土産を購入したため、いつもよりも十五分以上店を出るのが遅くなつたのだ。

貴重な時間を無駄にさせてしまい、千鶴はしゅんと肩を落とす。その様子をバックミラー越しに見ていた仙堂は軽く首を横に振つた。

「気になさらないください。待つのは慣れてますから」

正也が会議に入った時は、予定が二、三時間押すことも少なくないという。仙堂が慰めの言葉を告げてからハンドルに手を掛けると、千鶴はそれに待ったをかけ、持っていた紙袋を差し出した。

「あの、これを受け取ってください」

「これは？」

ハンドルから手を離し、仙堂は上半身を捻つて紙袋を受け取る。中には菓子折りが二箱入っていた。

「うちのお菓子なんですけど、今日まで送っていただけのお礼です」

一つはどら焼きだけの詰め合わせ。もう一つは様々な菓子を詰め込んだ、店で一番人気のものだ。この菓子折りが、一週間近くも迎えにきて貰つた礼に見合うとは思っていない。それでもせめてなにかをしたいと思つて用意したので。

ずっしりとした重みのあるそれらを、仙堂はそつと助手席に置く。そして再度背後を振り返つた。「ありがとうございます。赤坂も喜びます」

感謝されるのはなんとも面映ゆく、千鶴は困ったような笑みを返す。しかし仙堂が口にしたのは礼だけではなかった。

「お礼を貰ってしまつてから言うのは憚られるのですが、実は千鶴さんに一つお願いがあるんです」

「お願い、ですか？」

改まつた物言いに、思わず千鶴の背筋がピンと伸びる。

どのようなことを要求されるのか。身構えると、仙堂はわずかに目を細めて続けた。

「実は、少しお手伝いしていただきたいことがあります。アルバイトのようなものと考えていただけるとありがたいのですが」

「え？」

意外な内容を聞いて返答に迷う。対して、仙堂はそれ以上の詳しい説明をすることなく、前に向き直つた。

「詳細は、赤坂から聞かれた方がいいでしょう」

その言葉はこれから正也に会うことを示唆していて、千鶴は小さく肩を震わせた。

彼にももちろん、お礼を言いたいと思つていた。でもどうしてか、その名を聞いただけで胸がざわつくのだ。

とはいえ、菓子折り以外にも、きちんと彼らが望む形でお礼をしたいと思う。だからこそ、仙堂の申し出を断る理由はなかった。

千鶴は鼓動を落ち着かせるため、動き出した車の中から外の景色を見つめたまま、小さく深呼吸を繰り返した。

車に乗り込んでから、三十分ほどが経過しただろうか。

仙堂に連れて来られたのは、重たい門扉に守られた豪邸と言うにふさわしい屋敷だ。説明されなくても、ここがどこであるかは表札に掲げられた「赤坂」の文字が告げている。

門前で車を止め、仙堂が運転席側の窓を開けると、警備員がびしつと敬礼で返す。そして間もなく、大きな金属音と共にゆっくりと門扉が開かれた。

十数秒かかつてようやく開いた門をくぐり、銀杏の木が左右に立ち並んだ道をまっすぐ進んでいく。それから噴水やいくつかの建物を通り過ぎ、突き当たりに建つ屋敷の前に車が横付けされた。

恩義に反しても、断つておいた方がよかつただろうか。分不相応極まりない場所に來てしまつたと、千鶴は怖気付く。同時に、正也が政治家だという現実を、まざまざと突き付けられた気分だつた。

まるで鉛がつけられたように重い足を、なんとか車外に出して石畳の上に降り立つ。見上げるのは、ゆうに自分の住むアパートの二、三棟分はあろうかという屋敷だ。

必死に気を落ちつかせようとしている千鶴の前を通り過ぎ、仙堂が屋敷の玄関扉を開く。千鶴は無言のまま、彼の背を追つて一階右手奥にある部屋へと導かれた。

仙堂が二回ノックして開いたドアの先には、ソファに寝転がつて資料を読む正也の姿があつた。

「ただ今戻りました」

報告の音が耳に届くと、正也は手元の資料をテーブル上へ投げ捨てて、その身を起こした。

「ご苦労だったな。お前も、よく来たな」

仙堂に片手を上げた後、正也は千鶴に向かって目を細める。その穏やかな笑みに、千鶴は思わず視線を泳がせてしまう。

一方、正也はそれに気付かぬ様子で、おもむろにテーブル上にあつたポットを手に取る。次いでカップに紅茶を注ぎ入れ、自らの対面に置いた。

自分のために淹れてくれたのだろうか。そう推察するも、彼との身分の違いを目の当たりにした直後だからか、千鶴はなかなか正也の傍に歩み寄ることができない。

棒立ち状態を続けていると、正也は怪訝そうな顔を見せた。

「なんだ？ 俺が茶を淹れるのはそんなに意外か？」

「いえ、ありがとうございます」

多忙な彼を、これ以上煩わせてはいけない。そう思い立ち、千鶴はすぐさまソファに駆け寄り腰を下ろす。そのままの勢いでカップを手に取ると、正也はくつくつと喉を鳴らした。

「毒なんて入っていないから、安心しろ」

そんな懸念なんて、微塵も抱いていません。

声にならない非難を視線に込めるも、それを声に出すことなく、紅茶を口に含んだ。

「おいしい」

市販のティーバッグとは茶葉が違うからだろうか。渋みの少ないすっきりとした味わいに、それまでの緊張を忘れて素直な感想が漏れる。

感嘆の声に正也は満足げな表情を浮かべ、自身で注いだ紅茶を一気に飲み干した。

「それで、アルバイトというのはどういうことでしょうか？」

ようやく緊張が解けた頃合いで、早速目下の議題を口にする。

思い切つてさつさと用件を聞いてしまうに限るとばかりに問えば、正也はなぜか軽く首を捻つて仙堂を見遣つた。

「お前から話したんじゃないのか？」

すでに話はまとまっているとばかり思っていた——正也がそう告げると、仙堂は紅茶を優雅に一口含み、しれつと答えた。

「詳細は本人から話すのが道理かと」

主を差し置いて、出過ぎた真似をするわけにはいかない。そんな風に謙虚さを取り繕っている体だが、仙堂が今まどつている雰囲気は面倒事をこれ以上押し付けるなど言っているようにも感じられた。

秘書という立場上、厳格な上下関係があるとはかり思っていた。しかし、二人の間には雇用関係ではなく、親友のような信頼関係があるようにも感じられる。

そんな二人の間で視線を行き来させていると、正也は苦虫を噛み潰したような表情で小さく舌打ちし、千鶴に向き直つた。

「アルバイトと言つても、本業と同じで菓子を作ってもらいたいということだ。まあ、時折給仕の方も頼みたいんだがな。もちろん材料や器具、調理場などはこちらで準備する」

「仕事が終わってから、ここに来てお菓子を作れということですか？」

「ああ」

まさか場所を変えて和菓子作りをしると言われるとは夢にも思わず、千鶴は目を白黒させた。

わざわざここで作らなくても、店で売っている物を買った方が早い。そう言い返そうとするも、正也は先回りして言い放った。

「あいにく、要り用な時にいつでも店に行けるといふ身ではないんでな」

確かに、忙しい身の上であることは納得できるところだ。さらに正也はもう一つ、給仕についても重要な案件だと続ける。

「後援会や支援者家族との会合の時に現場を取り仕切ってくれていた者が、腰を患っててな」

正也は神妙な面持ちで、千鶴に手伝いを要請した理由について説明し始めた。

正也の父の代から赤坂家に仕え、後援会の重鎮にも顔の利く古参の使用人が、現在、腰の治療のために長期不在となっているのだという。

「後援会のジジイ共の中には、一癖も二癖もあるやつがいてな。日本人の茶菓子といたら和菓子だ！と豪語しやがる」

さらに、和菓子ならなんでもいいというわけではないらしい。どんな和菓子を出しても重箱の隅をつつくような文句を言つては、給仕をする使用人たちを困らせているのだと続ける。

まるで、長年にわたりどら焼きの好みで仙堂を困らせてきた誰かのようなようではないか。そんな考えが脳裏を過るも、千鶴は賢明にも声には出さなかった。

「そこでだ。作り手のお前がいれば、なにを聞かれてもきちんとした対応がとれて、ジジイ共も少おとなしくなるだろうと思つてな」

「はあ」

「もちろん、お前の作る和菓子が気に入られると確信していることが大前提だ。だがジジイ共も天邪鬼なやつだからな。イラつくこともあるだろうが、相手をしてやってほしい」

説明を聞き終えた千鶴は眉をハの字に下げて返事に困った。和菓子を作ることはなんでもないが、給仕や話し相手となれば別だ。

正也には恩があるし、自分の和菓子をそれほどまでに気に入ってくれたのなら、気持ちに応えたいと思う。けれども任せられた役を上手くこなせる自信がなくて、千鶴は不安に瞳を揺らした。

困惑を隠せずにいる表情を見て、正也はさらに畳み掛けるように続けた。

「店が閉店してから、夜遅くまで菓子作りの勉強をしていると聞いた。この前の一件もあるし、ここでそれをやっつては貰えないだろうか？」

もちろん、毎日の迎えはこれからも続ける。そんな破格の対応まで提示されて、千鶴はさすがに驚愕した。

「一体誰からそのことを？」

仙堂が迎えにきてくれていた期間は、遅くまで店に残っていたことはない。もちろん、そんな身

の上話をした覚えもない。

驚きに満ちた眼差しを向けると、答えを口にしたのは正也ではなく、仙堂だった。

「大家の方に私がお聞きしました。すみません」

勝手に私的な話を聞いてしまい申し訳ないと、頭を下げる。対して、責めるつもりもなかった千鶴は慌てて手を振った。

「いえ、謝っていただくことでは……。自主練習をしているのは、私がまだ和菓子職人として未熟だからです。なので、ご期待に沿えるとは思えません」

仕事に誇りを持っている。商品として提供している和菓子は、他のどの店にも負けない味だという自負もある。けれど、自分一人で賄える品目は決して多いとは言えない。技量も、十分だと胸を張れるほどではなかった。

正也の仕事に関わる人たちに提供するのであれば、もっと熟練の職人に声をかけた方がいいだろう。お礼のための仕事で、彼にとつて仇となることを懸念して断りを入れる。

千鶴が出した誠実な答えに、正也は前髪を乱暴に掻き上げた。

「お前の作る菓子の味は、他のどの店よりもうまいと思ったから頼んでいるんだ。それに、素性もなにもわからない相手においてそれと頼めることじゃないからな」

素性云々を言うなら、自分だって大して深い話をしたことがあるわけではない。千鶴は再度否定の言葉を紡ぐとするも、寸前でそうすることができなかつた。

目の前の光景を見て、絶句してしまつたからだ。

「できる限りの礼はする。だから、頼む」

世の中で手に入らないものの方が少ないであろう男が、太腰の上に拳を置き、深々と頭を下げたのだ。動揺するなど言う方が、無理な話だった。

千鶴は目が零れ落ちんばかりに見開き、気付いた時には身を乗り出していった。

「ちよ、頭を上げてください。……わかりましたから！」

どうしてこんな事態になつてしまつたのか。混乱したまま悲鳴を上げるように了承を告げる。すると言質を取つた正也は、すつと顔を上げて笑みを見せた。

思惑を実現させるために、頭を下げるなんて容易いこと。声にならないそんな思考が透けて見え、千鶴は口をばくばくさせて動揺を露わにする。

しかし、今更後悔したところで後の祭りだ。

騙されたことに憤りはある。それでも、頭を下げさせるより、自分が諦めた方が心臓に優しいと思つた。

「助かる。ありがとう」

「いえ……、まだなんの役にも立っていませんから」

仕事を引き受けたところで、期待に沿えるとは限らない。それに、なにか問題があれば、彼の方からすぐにやめてくれと言うだろう。

どつと疲れを感じながら呟くと、正也は満足げな表情で続けた。

「それからお前……、千鶴は免許を持っているのか？」

「え？ はあ……免許？ はい、持ってます」

普段、男性から名前呼びをされることなどほとんどない。そのため、千鶴は慣れない呼称に動揺して、素っ頓狂な声を上げてしまう。

だがすぐに質問の内容を理解し、なんとかうなずき返した。

ペーパードライバーも甚だしいものの、免許証はある。元々取る予定などなかったが、店主夫婦と登代子に強く勧められて取得したものだ。

仕事で運転を頼むことがあるかもしれない。そう言つて、店主は千鶴の代わりに一括で費用を支払い、教習所までの送迎を買って出してくれた。自分のことを想ってくれる彼の厚意をはねつけることなどできるはずもない。

家族同然に大事にしてもらっている喜びを改めて思い起こし、千鶴はふつと表情を緩めた。

「お店のご主人たちのご厚意で取らせていただいたんです。取得してからほとんど運転したことはないんですけど……」

彼の望む仕事内容に、車の運転も含まれているのだろうか。もしそうだとしたら、やはり断固として辞退しなければ。

そう決心する傍らで、正也は顎に手を当ててなにかを考え込む様子を見せる。そして数秒の後、仙堂に視線を送った。

「確か、車庫に軽が一台あったな。保険の確認をしておいてくれ」

「もう確認済みです。保険の内容については変更しておきました」

有言実行ならぬ、無言実行。命じられる前に先回りしたことを報告する仙堂に、正也は満足げに片眉を上げる。そして千鶴に向かい、一つの命令を下した。

「明日から帰宅後、仙堂に運転の指導を受けるといい。この敷地内でも、十分に教習所の代わりにするだろう」

公道に出る際には、しばらく自分か仙堂が付き添う。そう続けられ、千鶴はわけがわからないと訴えた。

「明日にはもう新しい自転車が届くので、必要ありません」

ここで仕事をする時に迎えに来てくれるのであれば、車など必要ない。忙しい正也や仙堂に付き合つて貰うのは無駄足になってしまう。

断固として拒否する姿勢を見せる千鶴に、正也はあからさまに溜息を吐いた。

「誰も慈善事業で言ってるんじゃない。ここから和菓子屋に通うのに、必要になるだろうと言っているんだ」

当面は仙堂のスケジュールを合わせることができる。けれど、いつ不測の事態が起きるかわからない中、備えておくにこしたことはない。

淡々と告げられる内容に、千鶴は納得するどころか、疑問が増えていくだけだった。

「ここから通うって、どういうことですか？」

菓子を作つて欲しいとは聞いたが、住み込みなんて聞いていない。それが条件になるなら、到底従うことはできなかつた。

危険があるうがなかるうが、自分の帰りたい家は登代子がいるあのアパートだけなのだから——
腫に怒りの炎を燃やして問いかけると、仙堂が淡々と割って入った。

「ここ、と言っても、敷地内にある別の建屋に住んでいただくことになります」
決定事項のように告げられ、千鶴は目を吊り上げた。

「そういうことでしたら、先程の話はお断りさせていただきます」

重要事項を黙っていたのだから、契約不履行にはならないだろう。語尾を強くして否定すると、
正也は眉間に手を当てて揉み解す仕草を見せた。

「こっちの話もしてなかったのか」

正也は千鶴の何倍も鋭い視線を仙堂に送る。一方、仙堂はそれを軽く受け流し、千鶴に向けて話を続けた。

「あとで登代子さんからお話があると思いますが……」

本来なら、細やかな説明をするのは自分の役目ではないと言いたいのだろう。一度、ちらりと不服そうな目で正也を見遣る。

それでも、千鶴を不快にさせたことに責任を感じているのか、仙堂は申し訳なさそうに説明を始めた。

「千鶴さんのお住まいのアパートですが、今度改築する予定だそうです。なので、工事が完了するまでの間、こちらに住まわせて貰えないかと登代子さんから打診されました」

「本当ですか!？」

改築だなんて、そんな大事なことを登代子はどうして言ってくれなかったのか。家族だと思っていたのは、自分だけだったのか。

千鶴が動揺でなにも言えなくなっていると、仙堂はさらに畳みかけた。

「以前、千鶴さんをお送りした際にお話を聞いたんです。他の住人の分を含めて仮住まいを探していたのですが、なかなかいい物件が見つけれなかったとのこと」

もちろん、登代子は千鶴を連れて行くつもりでした。しかし、空いているのはどこも和菓子屋から距離が遠く、今のアパートよりも夜道が危険なところばかりだったのだという。

引越し先を見つけてから話そうと思っていたものの、思うようにいかず。困り果てて、藁にも縋る想いで仙堂に協力を求めたのだ。

すると偶然にも、千鶴にアルバイトをしてほしいという正也側の要望を耳にした。結果、トントン拍子に話がまとまったのだ。

「登代子さんは、千鶴さんのことをとても心配なさっていました」

まるで心の内を見透かしたような仙堂の言葉に、千鶴はほうつと息を吐く。

邪険にしていたから話せなかったのではない。どんな不便を強いても千鶴は納得してくれる。それがわかるからこそ、最良の準備が整うまで内緒にしていた。

冷静に登代子の考えを代弁され、徐々に冷静さを取り戻していく。そしてしばしの後、千鶴は正也に向き直って静かに頭を下げた。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、少しの間、よろしくお願いいたします。それと仮住ま

いを提供していただくのですから、アルバイト代はいりません」

千鶴が住むのは他の使用人たちと同様、敷地内にある1LDKの平屋の一戸建てなのだという。登代子が骨を折って自分のために願い出てくれたのだ。彼女の厚意を無駄にするわけにはいかない。

そんな気持ちを込めて深くお礼を言うのと、正也はそつと目を細めた。

「住居は労働条件の一つだ。バイト代はそれとは別に考えてくれ」

あくまで、労働に対する対価は支払う。強く主張する正也に、千鶴はそれ以上反論しなかった。自分も強情な方だが、彼の方がきつと言いついたら聞かない性格なのだろう。意外な類似点を見つけ、千鶴はそつと笑いを噛み殺した。

「では、お菓子で返せるようにします。食べた物があつたら、どんどんリクエストしてくださいね」

和菓子であれば、店主に相談して練り切りや餡など、必要なものを常に確保しておくことができるだろう。

後援会の人たちはもちろんだが、正也にもおいしいと言って貰える和菓子を作りたい。どら焼き以外にも、彼の好みが広がってくれば嬉しいと思う。

そう告げると、正也は文字通り破顔した。

「それは十分すぎる礼だな」

家を提供したことに対しての礼にしては、お釣りが出るほどだ。そう語る正也の笑顔は、子供の

ように無邪気なものだった。

出自がよく、国会議員であつてもやはり人の子。千鶴はこの日初めて彼を身近に感じ、つられたように微笑んだ。

——しかし、わずかに抱いた親近感もこの日から約一ヶ月後の引っ越しの際には脆くも消え去ることとなる。

練習に使えと差し出された軽自動車は新車同然で、提供された住宅も新築とあって差し支えない綺麗さ。また、和菓子を作るために新設された厨房も、鏡面のような輝きを放っていた。もちろん、冷蔵庫やオーブンは業務用の新品が設置されている。

それら破格の対応に眩暈を覚え、思わずその場にしゃがみ込みたくなったのは言うまでもない。そして引っ越しの日の夜。早めに布団に入ったものの一向に眠気が襲ってくる気配はなく、千鶴は真つ白いクロスが張られた天井を見上げてぼつりと呟いた。

「お金持ちの感覚って、わからないわ……」

肌寒い季節はとうに過ぎ去ったはずだ。なのに軽い寒気を感じて頭から布団を被ると、子猫のように身体を丸めて眠りについた。